

津波の教訓頭に 岩手・大槌生まれの男性が 台風避難ためらう90代夫婦を説得、命救う

台風19号に伴う夏井川の氾濫で浸水したいわき市小川町高萩で、衣料品販売店を営む碓川寛さん(72)はためらう近所の高齢者夫婦を半ば強引に避難所へ移動させ、命を救った。東日本大震災の津波で、甚大な被害を受けた岩手県大槌町の生まれ。震災の教訓が頭をよぎり「万が一のことがあれば、悔やみ切れない」と動いた。

■「感謝しかない」

「あのままでは両親は死んでいた。碓川さんには感謝しかない」。村上高也さん(91)、道子さん(92)夫妻の長女(63)は言う。

行政区長も務める碓川さんは台風が接近した12日午後、2人暮らしの村上さん方を妻の泰子さん(68)と訪ね、避難を勧めた。道さんは店のお客さん。日頃から気に掛けていた夫婦だった。

しかし、2人は「避難しない」と言う。高也さんは10年前から左半身が不自由。大半をベッドで過ごし、避難所が不安だった。

「早くご飯を食べて寝てしまいな。起きた時には台風も過ぎているよ」。東京に住む長女も自宅にとどまるよう両親に電話で助言していた。碓川さんは長女と電話で話したが「大丈夫だから。避難させないでください」とらちが明かない。

「放っておくか」。一瞬そう思った碓川さんだが「後悔したくない。見殺しにしない」と思い直す。大勢が津波の犠牲になった大槌町のことが頭にあった。

親類の養子に入り、いわき育ちだが生まれたのは大槌。震災対応に当たった碓川豊前町長(68)は実弟だ。震災後に何度も大槌に手伝いに行き、全てを奪い去る水の威力を目の当たりにした。

■「最悪」想定して

12日夕、地元の消防署分遣所の職員3人の力を借りて高也さんを抱え上げて車に乗せ、自力で歩ける道さんと一緒に夫妻で地区の高萩公民館に避難した。その夜、夏井川から押し寄せた濁流は市小川支所周辺を襲い、碓川さんの自宅は水没。村上さん方の浸水も2メートル近くに達した。

駆け付けた長女は泥だらけになった実家で「甘く見ていた。災害は今まで被害がなかったら大丈夫と考えては駄目」と反省を口にした。高也さんは市内の福祉施設に一時入所し、道さんは親類方に身を寄せる。

碓川さんは自宅を片付けながら「避難して何でもなかったら『良かったね』と考えればいいこと。最悪の事態を考えて動いた方がいい」と話した。(佐藤崇)

「息子に障害」避難ためらう 宮城・丸森の自宅に土砂流入

台風19号の直撃を受けた12日、宮城県丸森町の販売員佐久間明美さん（54）は「障害のある息子を避難所に連れて行けない」と自宅にとどまり、土砂災害に遭った。緊急時に「周囲に迷惑が掛かる」とためらう保護者。台風被災地でも、ハンディのある人々の避難の難しさが浮き彫りになった。

天井と壁の隙間から青空が広がる。土砂をかき出す重機も見える。「何が正解だったのか」。佐久間さんが土砂でいっぱいになった1階の長女（21）の部屋でつぶやいた。

12日夜、両親と長女、中学3年の長男（15）と自宅にいた。雨音が強まる。テレビのアナウンサーが「命を守る行動を」と繰り返す。そのたびに「無理」と思った。自閉症の長男は自室から出るのを拒み、長女は手足が不自由。2階への避難もできない。

午後7時ごろ、「ドン」と自宅が揺れた。裏山側にある長女の部屋の窓が土砂で開かなくなった。命の危険を感じ、長女と母（79）を町役場に避難させた。長男は人が多い避難所に行けばパニックになる。佐久間さんは父（80）と長男の3人で自宅にとどまった。

電灯が点滅する。午後11時ごろ、2度目の衝撃音が響く。長女の部屋に大量の土砂がなだれ込み、廊下側に水が漏れ出した。家全体に広がらないよう尿取りパットを隙間に押し込んだ。

幸い長男は薬を飲み、眠っていた。「早く朝になって。これ以上、崩れないで」。祈るしかなかった。

水が引いた15日、町役場に長女と母を迎えに行った。親戚宅に身を寄せたが長居はできない。子どもたちの生活を考えると壁1枚を隔てた賃貸住宅は避けたい。玄関先に車を横付けできる一軒家を探した。

隣の角田市で見つけた中古物件は修理が必要で、自宅と親戚宅を行き来している。悩みは断水だ。自閉症は生活のリズムを崩さないのが鉄則。泥が混じる井戸水を風呂に入れて沸かし、長男を入浴させている。自衛隊が設置した風呂は付き添いができず、諦めた。

佐久間さんは「命を落とさなかったのは運が良かっただけ。障害者らの避難の問題に向き合い、同じような境遇に陥る人が再び出ないでほしい」と願う。

（桐生薫子）